



Museum Café

コミックの気分で描かれた、短編小説のような油絵。

ミッシェル・ロバート ● 新藤久美子 インタビューと写真

私が初めてミッシェル・ロバートの絵を見たのは、おととしのこと。サンタモニカにある「ロバート・バーマン・ギャラリー」で見かけて、とにかくその第一印象が鮮烈！

中でも目を惹いたのは「How could he tell her?」というタイトルの作品。ドア一枚分くらいある大型のキャンバスを3つにコマ割りして、油絵員でコミックタッチのラブ・ストーリーを展開させた……という作風がとても新鮮で、しかも色がとび

きりビビッド。油絵の新しいスタイルを見た気がして感動したことを、今でもよく覚えている。

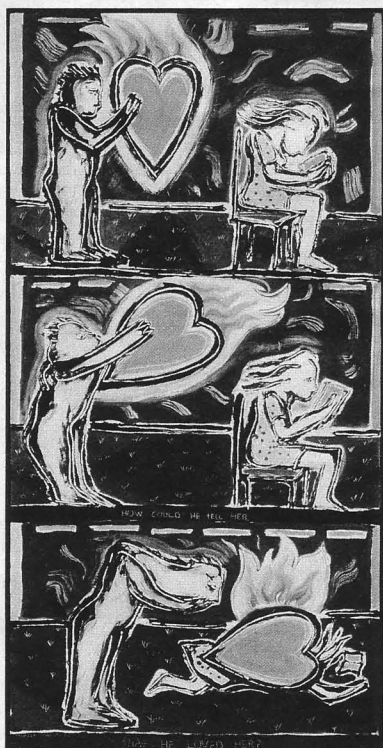
1954年、ロサンゼルスに生まれた彼女は、小さい頃からコミックに没頭し、自分でせっせと描いては友だちに配っていたという。やがて大学でファイン・アートを専攻したのちもコミックへの熱い想いは絶えることがなかった。

「私が興味があるのはラブ・トリ・ジョン・シップ。私たちがふだんの生活の中で出会う劇的な瞬間やストーリーを、作品の中でできるだけ正直に表現したいと思ったの。」

そのためには、コミックの手法が最適だわ。油絵や版画でも、だから画面をコマ割りしたり文字を書きこんだりして、ショートストーリーを展開させたいと思っているわけ」

というミッシェルは、その言葉どおり、生活の風景や微妙な気持ちの動きを、コマ割りのキャンバスに生き生きと、愛嬌のあるタッチで、まるで短編小説のように表現する。

ところで、誰がいったい、キャンバスと油絵員を目の前にして、コミックを描こうなどと考えつくものだろうか。ミッシェルは、そんな既成概念の枠をひよいと乗り越えて、自



「How could he tell her?」赤、青、黄で実際は色鮮やか。

然体で油絵・コミックに挑戦している。

そんな彼女にファンは多く、早くもマドンナ、J・ブラウンがコレクターとなったというし、この春発売のS・ウィンウッドのLPジャケットにも彼女の作品が使われている。

ロスの権威あるギャラリーで次々と個展を開いて、美術界での評価が高まる一方、お洒落なギャラリー・レストラン（今ロサンゼルスでは、本格的な展示設備をもつレストラン

が人気）でも軒並その作品が飾られているというからポピュラリティのほうもかなりのものといえそうだ。実際の彼女は物静かであったかい印象のチャームिंगな女性。サンタモニカの海岸近くに、パートナーの



アンディーと2匹の犬たちと、アトリエを兼ねた住まいを構えている。彼女の生活を満たす静けさ、時折の微妙な不安、そして愛情。これらが画面からストレートに伝わってくる波動を気持ちよく感じ取りたい。

アトリエのミッシェル。いま太極拳に興味津々。